

【書 評】

城生 佰太郎・福盛 貴弘・斎藤 純男 編著 (2011)
『音声学基本事典』東京：勉誠出版、xi+540pp.

三浦 弘[†]

無人島で一年間過ごさなければならないときに、一冊の本しか持っていくことが許されないとしたら、迷わずに本書を選ぶであろう。通読したところ、気が置けない仲間と興味のある話題について語り合っているような印象を受けた。あるいは、以前観た名画を再度視聴して、新発見の余韻をしばらく味わっているような読後感があるとも言える。

本書は3名の執筆委員と各分野を代表する27名の執筆者が6年の歳月をかけて上梓したものである。その3名の執筆委員は皆、奇しくも十干の異なる戌年生まれである。十二支が同じで十干が違う(丙・戊・庚)ということは、12年ずつ年代が分かれているということなので、取りあげられた研究の動向も今後の展望もとても射程距離が長くなり、その効果が見事に現れている。執筆陣も著名な大家から新進気鋭の若手の代表者までが含まれている。大家の項目では、まとめ方の巧みに敬服し、気鋭が書いた項目では、発想の新鮮さに感心させられた。

この事典を読めば、音声学の概要と音韻論の要点がすべてわかる。「辞典」ではなく、「事典」であるので、用語の解説に終始することがない。執筆者たち自身の研究成果に応じて、議論を自由に展開しているところが本書の特長であり、読みやすさの理由であろう。議論の展開が個性的で、共時的な個別言語の例もあれば、通時的で比較言語学的な例もあって、評者の予測に反して、「そう来たか」と感心させられる場面が多々あった。

立項は98項目、それが9つの章に分かれている。用語を調べたいときには、巻末の索引を見ればいい。これは読むための事典である。否、是非とも通読してもらいたい本である。情報が詰まっていて、これからの研究のためのヒントが満載である。本当にさまざまなインスピレーションが湧き上がってくるのである。参考文献も充実している。何と云っても、項目(担当執筆者の小さなまとまり)ごとに参考文献が付与されているから読みやすくありがたい。

さて、項目について紹介させていただく。項目だけを見ても、編集委員の意図がよくわかる。ただの「辞典」ではなく、概説書(研究書)とお考えいただきたい。

第1章 音声学

音声学、音声、文字と音声、音声記号、IPA、一般音声学 / 応用音声学、実験音声学

第2章 調音音声学

調音音声学、音声器官、呼気 / 吸気、声帯、発声、喉頭原音、有声化 / 無声化、口音 / 鼻音、舌、調音位置、調音様式、中舌化、中央化、二次的調音、二重調音

第3章 音響音声学

音響音声学、音響スペクトル、基本周波数、フォルマント周波数、サウンドスペクトログラム、音声合成、ローカス、持続時間長、声紋

第4章 聴覚音声学

聴覚音声学、聴覚器官、聴こえ、脳科学と音声学

[†]専修大学

第5章 音韻論

音韻論、音韻体系、音素、弁別素性、通時音韻論、音変化、音韻交替、音価、グリムの法則/ヴェルネルの法則、同化/異化、転写/転字、音位転倒、記述音韻論、オノマトペ、リエゾン、形態音韻論(形態音素論)、母音調和、生成音韻論、非線形音韻論、語彙音韻論、素性階層論、最適性理論

第6章 アクセント・イントネーション

アクセント、自由アクセント/固定アクセント、音調、声調、アクセント単位、アクセント記号、アクセント核、アクセント素、シュワー、イントネーション、イントネーション類型

第7章 プロソディー

プロソディー、発話速度、リズム、音声学的無音現象、ポーズ、フィラー、強調、段落、文節、音節、開音節/閉音節、モーラ

第8章 単音・分節音

単音/分節音、母音類/子音類、母音、緊張母音/弛緩母音、半母音、子音、無声音/有声音、硬音/軟音、長音/短音、わたり音

第9章 日本語の音声

日本語の音声、直音/拗音、清音/濁音/半濁音、ガ行鼻音、促音、撥音、音便、日本語のアクセント

上記の見出しだけでは堅苦しいようにも見えて、面白さは伝わりにくいですが、小見出しが効果的になっている。是非とも手に取っていただきたい。学生にも手元に置いてバイブルとしてほしいのだが、教科書として指定するにはちょっと値が高い(8,000円)。唯一の弱点であろう。